

夏秋系黄一輪菊「寄（き）の山陽」の特性調査

～葉の日持ちに優れる黄色の鮮やかな新品種～

吉川 那々子（知多農林水産事務所農業改良普及課）

【令和2年4月21日掲載】

【要約】

夏秋系黄一輪菊「寄の山陽」の特性について「精の光彩」を対照品種として調査した結果、「寄の山陽」は消灯までの草丈伸長性に優れるが、到花日数がやや長く、栽培期間が長くなった。切り花及び葉の日持ち性は「寄の山陽」が「精の光彩」と比べ優れていた。

1 はじめに（目的）

知多地域では平成27年から夏秋系黄一輪菊「精の光彩」を栽培しているが、栽培中の葉先焼け、出荷先での葉の黒変等が問題になってきた。そこで市場担当者から紹介された新品種「寄の山陽」の試作を行い、その生育特性及び切り花品質を評価した。

2 展示概要、調査方法

試験品種「寄の山陽」、対照品種「精の光彩」とし、生育及び品質調査を実施した。また、ほ場及び出荷市場における葉の障害の発生状況を聞き取りで調査した。さらに、農業改良普及課内で日持ち性調査を実施した。調査ほ場の耕種概要は対照品種の慣行条件とし、定植4月26日、摘心5月3日、消灯6月17日、収穫7月26日～8月16日である。

3 結果

（1）生育及び品質について

調査の結果、「寄の山陽」は消灯時の草丈が高く、消灯までの草丈伸長性に優れるが、消灯から収穫までの草丈伸長量は「精の光彩」と同程度であった（表1）。また、「寄の山陽」は摘心後の萌芽数が多かった。茎径および80cm切り花重は「寄の山陽」の方が小さく、「精の光彩」の方がボリュームのある草姿であった。到花日数は「寄の山陽」が長く、栽培期間が長かった。

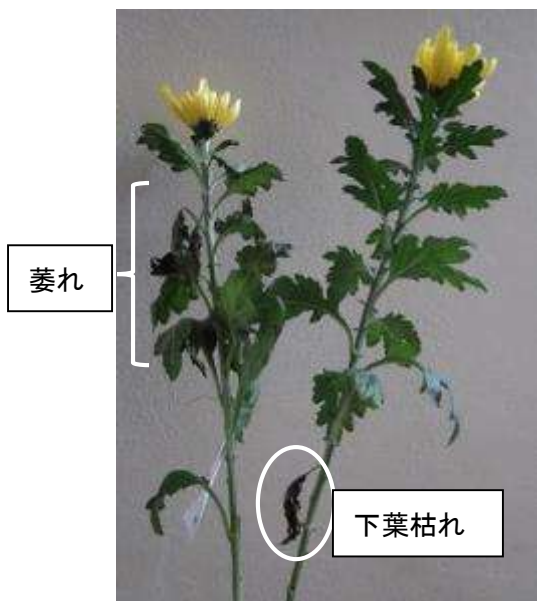
表1 生育および品質調査結果

	草丈			萌芽数	茎径	80cm 切花重	到花日数
	消灯時	収穫時	収穫時－消灯時				
	cm	cm	cm	本	mm	g	日
寄の山陽	54.8	91.9	37.1	4.1	5.5	36.5	45
精の光彩	46.8	84.3	37.5	2.0	6.0	38.4	39

（2）病虫害、葉の障害の発生状況及び日持ち性について

本試験では、2品種とも葉の障害の発生は認められなかった。

日持ち日数は、「寄の山陽」は17.6日、「精の光彩」は15.8日であり、「寄の山陽」の



「精の光彩」 「寄の山陽」

写真1 葉の様子

日持ちが長かった。特に葉の枯れ方が異なり、「精の光彩」は14日後から葉の一部で萎れが発生し、16日後に全体の葉が急激に萎れたのに対し、「寄の山陽」は収穫10日後から下葉の枯れが発生し、18日後に下位1/3程度が枯れあがった(写真1)。花の開花は「寄の山陽」がやや早かった(写真2)。



「精の光彩」 「寄の山陽」

写真2 花の様子

4 まとめ(考察)

(1) 生育及び品質について

「寄の山陽」は「精の光彩」に比べ、到花日数が長く、年3作のローテーションを組む生産者にとっては、「寄の山陽」に切り替えることで、施設回転率が落ちる可能性がある。今回調査した8月開花作型その他、6～7月上旬の開花作型では「精の光彩」の到花日数46日に対し、「寄の山陽」は到花日数が55日かかる事例もあった。「寄の山陽」の到花日数が長くなった原因としては、親株の管理温度や花芽分化時の夜温が低かったことが考えられる。

一方、「寄の山陽」は消灯時までの草丈伸長性が優れるため、消灯を早くすることで栽培期間を短縮できる可能性がある。

(2) 葉の障害の発生状況と日持ち性について

今回の調査では葉の障害はみられなかったが、これは遮光資材による遮光が適切に行われたことと、7月に曇天日が多かったためと考えられる。なお、調査ほ場ではない9月開花作の「精の光彩」は葉先枯れや葉焼けがみられたが、「寄の山陽」は下葉枯れが一部みられたものの、葉焼けや葉先枯れはみられなかった。「寄の山陽」の下葉枯れについては、市場担当者は下位葉を除去すれば利用上問題ないため、「寄の山陽」の方が葉の日持ちが優れるとの評価であった。

以上のことから、「寄の山陽」は葉の日持ちがよく市場からの評価は高いが、栽培期間が長いことが課題である。今後は栽培期間の短縮のために栽培方法の改善を図る必要がある。